【 6 】

氏名	荻 野 健 次
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	甲 第 437 号
学位授与の日付	昭和52年3月31日
学位授与の要件	医学研究科外科系外科学専攻 （学位規則第5条第1項該当）
学位論文題目	**大動脈症候群における免疫学的研究**
論文審査委員	教授 田中早苗　教授 大藤 眞　教授 小川勝士

学位論文内容の要旨

大動脈炎症候群の成因に関しては未だ不明である。近年の免疫学の発達に伴い，本症の成因に免疫学的異常の関与を報告する知見が多くなった。そこで著者は本症における免疫異常を細胞性免疫面より，非特異的抗原であるツ反，ＤＮＣＢ皮膚反応，ＰＨＡリンパ球幼若化反応，特異的抗原として大動脈抽出物によるリンパ球幼若化反応を，さらに，末梢リンパ球数およびＴ細胞含有率を，体液性免疫面より抗大動脈抗体，抗核抗体，抗甲状腺抗体，ＲＡ反応，ＡＳＬＯ価およびＡＳＫ値を検索した。対象は本症患者45例で，病期別に，ＰＳＬ投与されていない血沈1時間値40㎜以上の症例を活動期群，ＰＳＬ投与群，血沈1時間値40㎜未満を寛解期群に分け比較検討した。

1. ツ反は活動期群では反応の低下を，ＰＳＬ少量（1日量5～10㎎）投与群では正常，多量投与群では低下を示し，寛解期群では正常であった。また活動期陰性でＰＳＬ投与にて陽転した症例を5例に認めた。
2. ＤＮＣＢ皮膚反応は健常者にはほぼ100％陽性となるといわれるが，本症活動期群71.4％，ＰＳＬ投与群62.5％，寛解期群100％の陽性率であった。
3. ＰＨＡ幼若化反応は，ほぼツ反の成績と同様な傾向を示し，活動期群や多量ＰＳＬ投与群（1日量15㎎以上）に反応の低下を認め，少量のＰＳＬ投与群および寛解期群では正常であった。
4. 末梢血リンパ球数は寛解期を除く各々の群に増加を示した。Ｔ細胞含有率では，活動期群，少量のＰＳＬ投与群，寛解期群共に対照に比し有意差は認めなかったが，多量ＰＳＬ投与群では低下を示した。
5. 特異的抗原として大動脈抽出物を添加してリンパ球の幼若化を検索したが，差は認められなかった。

6. 大動脈抽出物を抗原として補体結合反応により抗大動脈抗体の検索を行った結果，活動期に高率に出現したが，対照群にも陽性例がかなり認められ，抗原稀釈倍数も低率であった。

7. 抗核抗体，抗甲状腺抗体，ＲＡ反応などの確立された自己抗体の出現頻度は活動期に高率であった。

8. ＡＳＬＯ価は本症活動期に19.3％陽性例を示し，ＡＳＫ値もほぼ平行しており，それら陽性例はいずれも推定発症よりの経過の短いものであった。

以上の如く，本症活動期には細胞性免疫の低下が認められ，本症の成因もしくは病態に細胞性免疫異常が関与することが考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は大動脈炎症候群の免疫学的研究であって，本症における免疫学的態度を細胞性免疫と体液性免疫との両面より追求してゆき，本症の成因あるいは病態に細胞性免疫異常が関与していることを証明した点において価値ある業績と認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。